

國學院大學学術情報リポジトリ

2022年度国際研究フォーラム「ミュージアムでみせる宗教文化」報告書

メタデータ	言語: Japanese 出版者: 公開日: 2025-05-21 キーワード (Ja): NDC9:069.5, NDC9:160.4, NDC9:161.3 キーワード (En): 作成者: 國學院大學研究開発推進機構日本文化研究所 メールアドレス: 所属:
URL	https://doi.org/10.57529/0002001632

展示するモノと展示するコト —仏教文化の視点から—

熊谷 貴史

(佛教大学宗教文化ミュージアム 学芸員)

はじめに

佛教大学は浄土宗の宗門校である。佛教大学の附置機関である宗教文化ミュージアムは、京都の近郊、嵯峨広沢に所在する。長閑で美しい嵯峨野の風情を味わうことができる反面、交通アクセスにやや難があり、一般的な京都の観光コースには組み込みにくい。おそらく何かのついでに立ち寄る来館者は少なく、「宗教文化ミュージアムへ行く！」という確固たる決意を要する、と思われる。著名な観光地、また博物館・美術館の選択肢が多く存在する京都にあって、どのようにすれば当館へ足を運んでいただけるだろう。いや、そもそも存在を知ってもらう必要がある。という悩みからはじまる話。

1 佛教大学宗教文化ミュージアムのとある事情

当館は、2003年に設置された佛教大学アジア宗教文化情報研究所を母体とし、2008年に佛教大学宗教文化ミュージアムとして改組された。2014年、博物館相当施設（現・指定施設）に指定。佛教大学の建学の理念である仏教精神「仏教を開いたゴータマ・ブッダ（釈尊）と浄土宗を開いた法然上人とに共通する生き方と考え方」を基軸に、広く「宗教文化」を視野に入れたミュージアムである。

ミュージアムへの改組後も、研究所時代の事業や成果などを踏襲し、また有形資料の収集を主たる目的としない方針を引き継いでいる（研究所時代に「情報」を重視していたことによる）。例外的に、本学のキャンパス開発時に出土した考古資料のほか、学内他部署より移管された幾つかの資料群を保管してはいるものの、館名に掲げる「宗教文化」に関する展示を継続的に構成しうる資料群とはいいい難い。換言すると、「宗教文化」にまつわる「展示するモノ」をほぼ所蔵していないのである。したがって展示品は、概して外部からの借用品あるいは寄託品による。

ところで発表者は、当館の学芸員として第三世代にあたる。展示に関して、前身の

研究所時代からミュージアム改組後の初期を担った学芸員は、当館の可能性を模索するような活動を展開、特定の地域や寺院の調査を重ね、その成果を展示に反映した。その後を引き継いだ学芸員は、展覧会の方針や枠組みを整理し、浄土宗に焦点をあてた企画、いわば宗門校として堅実なスタンスの展覧会を重ねた。さらに2018年より発表者の世代が着任して現在へ至るが、前任者らが蓄積してきた活動や成果を受け継ぎながらも、やはり展示の在りようには変化がある。担当者によって趣向が変わることはある意味で必然かもしれない。しかし根幹となる「宗教文化」に結びつくコレクションを所有していないことが、その傾向をより顕著にしているだろう。

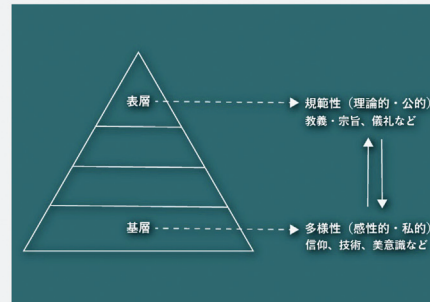
ともあれ現状、仏教・浄土宗を念頭において展示を構想する際には、「浄土宗に特化したテーマ」と「浄土宗を相対的に特徴づけるテーマ」のいずれかを意識することが多い。このうち前者は、宗内や学内の一定の来館者層を見込めるものの、より多くの層に来館を促すことは（館の規模や立地の問題もあって）難しい。そこで近年、浄土宗に限定しないテーマを設定し、そこに浄土宗に関する事項を含めることにより、相対的に浄土宗の特徴にも眼を向ける展覧会シリーズを企画した。特別展「ほとけの手―黙して大いに語る―」（2019）、特別展「ほとけのヘアスタイル―それは単なるオシャレではない―」（2021）、特別展「ほとけのドレスコード」（2022）などである。これらを含め、発表者が担当した幾つかの展覧会を取りあげ、仏教文化の視点から「ミュージアムでみせる宗教文化」に眼を向けよう。

2 宗教文化／仏教文化の捉え方

前提として、本報告における「宗教文化」あるいは「仏教文化」の捉え方を確認しておく。ここでは、ある宗教の在りようを多層的（表層―基層）に捉え、教義や宗旨を「宗教」の表層、基層に展開する多様な事象（必ずしも教義や宗旨に縛られない事柄）を含む概念を「宗教文化」と考える。「仏教文化」は、「仏教」に関わる人間の諸活動を包括する。例えば仏像（仏教尊像）には尊容を方向づける教義・宗旨・図像などがあり、それを指南する僧侶とともに、発願者・制作者・拝観者たちがそれぞれの立場で関与する。制作者の造形技術は、教義や宗旨とは異なる次元で仏教文化を支える要素のひとつ。仏像は有形、技術は無形の仏教文化といえる。

また仏教は、それ自体が極めて多様な側面をもつ。時代や地域を経て成立・伝播した膨大な仏典群と多くの宗派、それぞれに特徴的な思想や活動、そして造形物がある。宗門校を設置する宗派も多く、附属の博物館も散見する。公立館・私立館を問わず仏教に関する展示をよくみかける。展示の対象となりうるテーマや事物のヴァリエーションは、今回、ご一緒させて頂いた神道・キリスト教の方々に比して相対的に多そうである。この点に、仏教特有の事情がひとつあるかもしれない。多くの仏教関連の

- 文化と宗教／宗教の文化 cf.文化⇔自然
- 宗教文化：ある宗教の在りようを多層的（表層－基層）に捉えた場合、基層に展開する多様な事象を含む概念（それに眼を向ける視点）と考える
- 仏教文化：仏教に関わる人間の営み全般／習合現象を含む
- 仏教そのものの多様性：伝播・変遷／膨大な仏典群／多くの宗派・宗旨
- 宗教的造形物（造形活動）
- ex.尊像：寺院の本尊・信仰の対象／
発願者・制作者・拝観者／
図像と表現／素材や技法
- 仏教美術と文化財
- 宗教的な行為・機能・情操
- 禁忌・秘事（⇔公開）



仏教文化

図1 「仏教文化」をめぐる視点

展示が企画されるなかで、おそらく発表者の企画はイレギュラーな部類に属す。お声がけ頂いた理由もそのあたりにあるのだろう。その意味で、仏教や仏教文化に関する展示を代表するようなスタンスではない。

なお、ここで「宗教文化」「仏教文化」という場合の文化は、いわゆる指定文化財のような価値づけとは異なるものも含む。例えば、尊像の安置方法や法衣の着装方法などである。また発表者は仏教美術史を専門としているが、美術や芸術という概念にも留意が必要な場合がある。仏像を拝観するとき、あるいは仏像の話題をとりあげるとき、文化財や仏教美術という捉え方に違和感を抱かれる寺院関係者も少なくない。展示に向けてご相談するときには、尊像や什宝を護持されてきた立場を尊重しながら、当方も意を尽くす。ご住職のご意向のみならず、檀家総代の同意を要するケースもあり、そのようなあり方も広義の「宗教文化」や「仏教文化」といえるかもしれない。

3 展示するモノ

物質性をもつ有形の展示品を「モノ」と捉えよう。しかし、仏像を「モノ」と呼ぶには躊躇がある。という感覚もまた、宗教文化の範疇といえようか。仏像は開眼を経て祀られ、移動・修復・浄焚などの際には御性根を抜く（撥遣・閉眼とも）。信仰対象である、という性格が根幹にある。仏教に関する展示では、様々な観点からこの点に配慮する。この事情は当館に限らないだろう。

ともあれ展示を構想する際には、まず「実物」を展示する可能性を考え、諸条件

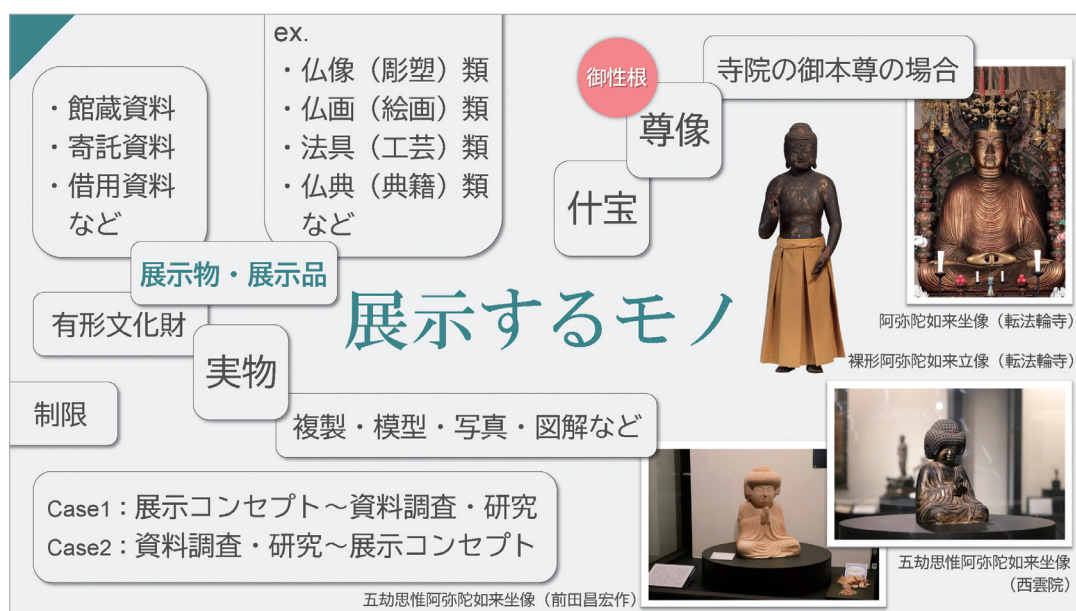


図2 「展示するモノ」をめぐる視点

（所有者の意向・安置状況・指定状況・保存状態など）を確認する。とくに寺院の御本尊として祀られる仏像は、寺院の営みを考慮し、慎重に検討する必要がある。諸条件が整い、関係各所の許諾を得た場合は、信仰対象である仏像を博物館で展示させて頂くことがかなう。一方、諸々の制限により実物の展示がかなわない場合には、複製・模型・写真・図解などの二次資料を援用して展示を構成することもある。むしろそれらは実物が具える情報量、あるいは魅力に及ばず、しばしばレプリカをめぐる議論で指摘されるように、観覧者も実物を期待する傾向がある。二次資料のみで構成された展示の例も知られるが、現状は特殊な部類に属すだろう。むしろ二次資料の製作も形態によってはそれなりの費用や時間を要し、実現には一定のハードルがある。

ところで発表者の場合、展示コンセプトを大まかにつくり、それに相応しい展示品の候補を選定し、調査・出陳交渉を重ねて展示に反映する場合が多い（継続的・悉皆的な調査の成果に基づいて展示コンセプトが案出される場合とは順序が逆になる）。特別展「ほとけのヘアスタイル—それは単なるオシャレではない—」（2021）も、先立つ展覧会の後継企画として、テーマやコンセプトは早い段階で固まっていた。如来の螺髪、菩薩の髻、明王の焰髪など、仏尊・仏像の髪に焦点をあてよう。そして浄土宗にまつわる事項として、五劫思惟阿弥陀をとりあげたい。阿弥陀如来は、かつて法蔵菩薩であったとき、衆生を救うために長い時間（五劫）思惟したという。この思想を背景とする五劫思惟阿弥陀如来像は、髪が長く伸びた状態を表し、長い時間の経過を表象する。ただし螺髪という仏（仏陀／如来）特有のヘアスタイルを基調とするため、

ロングヘアではなく、ボリューム感を増し、しばしばアフロヘアに擬えられる。これはぜひ事例を展示したい。しかしながら準備は難航。というのも新型コロナウイルス感染症拡大の影響により、外部での調査が困難な状況が続いたからである。

そこで従前お世話になっている仏師の前田昌宏氏に、無理を承知で尋ねてみる。五劫思惟阿弥陀如来像の新造である。「いいですよ」と二つ返事。この造像は、模像や複製ではなく、あくまで前田氏のオリジナル作品とすることにした（形式を参考にした御像は存在する）。その顛末および成果は、試論的に別稿「現役仏師が造った仏像の展示—レプリカではないことをめぐって—」（『佛教大学宗教文化ミュージアム研究紀要』18、2022）に記したが、この新造の五劫思惟阿弥陀如来像は「模型的機能を担うオリジナル作品」と位置づけておく。また制作の記録と彫技の分析を通じ、古像の造形を読み解く手がかりを得たことは、副産物的な成果であった。

なお平行して展示可能な五劫思惟阿弥陀如来像の調査を進め、結果的には江戸時代の作とみられる小像の出陳がなかった。前田氏による新作とあわせ、五劫思惟阿弥陀のボリューム感あふれる特徴的なすがたは、立体造形物の展示によって強く印象に残っただろう。

さらにこの展覧会では、別途、前田氏が制作を手がけていた未完成の不動明王像を展示させて頂いた。不動明王も特徴的な髪をもつ仏尊であり、展覧会の趣旨に合致する。そしてこの御像は、将来、寺院に納められる。したがって信仰の範疇においては本物、いわば真正性を具えることになる。また展示期間中、前田氏のご都合のよい時には当館内で適宜制作を進めてもらい、その様子を来館者が見学できるようにした。制作が進むと、過日のすがたは二度とみることができない。制作の場は、前田氏の気さくな人柄もあって、観覧者との対話を含む和やかなムード。いずれ寺院にお祀りされた際には、あらためてお参りに行きたいという声もあった。前田氏と施主のご住職のご厚意によって実現した、実験的な展示であった。「展示するモノ」としては未完成の仏像であるが、仏像制作の工程や技術という、無形の仏教文化を垣間見ることができる。後述の「展示するコト」に結びつく視点である。

なお前述の五劫思惟阿弥陀如来像は、展覧会の終了後も寄託品として平常展示などで活用させて頂いていたが、後日、京都市内のある浄土宗寺院とご縁を得て、奉納されることになった。喜ばしいことである。しかし「展示するモノ」がひとつ減った。と思っていたら、発表者を哀れんだ前田氏が二代目を制作してくださることになった。現状、木組みをした段階で展示をしている。初代は展覧会に向けた急ピッチの制作であった。今回はなるべく時間をかけ、ゆっくり制作を進めて頂くことにしよう。観覧者が次に来館される際には、少し彫り進められているかもしれない。

4 展示するコト

当館は宗教文化シアターという劇場施設を併設している。主に大念仏狂言や六斎念仏などの民俗芸能、いわゆる無形文化財の実演や記録上映などを実施する。開館以来、「展示」と「実演」を同じウエイトで重視する方針がとられ、おそらく展示は有形、実演は無形、という暗黙の棲み分けがあった。しかしこのカテゴライズは、展示の視点や可能性を狭めているかもしれない。仏教文化に属す無形の事象は多岐に及ぶ。無形の仏教文化に眼を向けるような展示。あるいは有形の仏教文化にともなう無形の事象など。様々な視点や方法がありそうだ。

仏尊・仏像の手に焦点をあてた特別展「ほとけの手―黙して大いに語る―」(2019)では、四国地方のある寺院より千手観音像の手部の断片群を借用した。千手観音なので手首先の部材だけで沢山ある(展示には保存状態のよい一部の部材を選定)。どのように展示するか検討の末、通常は眼にすることのない部分や角度が見えるよう、円形の展示台上にランダムに配置することにした。視覚的なインパクトもある。個別には丸みを基調とする平安時代の作とみられる菩薩の手。持物(亡失)に応じてニュアンスを変える手指、断片ながら存在感がある。このうち明らかに後補とみられる部材があり、それはクイズ形式で観覧者に探してもらうことにした(答えは展示室内の別の場所に掲示)。このような視点でみると、この断片群には無形の仏教文化が幾つも付帯している。菩薩の手を造形する技術。破損した菩薩の手を補作する態度や技術。断片となってなお現在に至るまで護持してきた態度。広い意味で仏教文化と捉えうる



図3 「展示するコト」をめぐる視点



徳島・雲辺寺 千手観音像断片（脇手手首先）

図4 特別展「ほとけの手—黙して大いに語る—」(2019) チラシ・展示風景

事象は多そうである。この展覧会の時点では、そこまで強く意識はしていなかったが、「モノ」にまつわる「コト」をみせる展示を模索していたように思う。

次いで、後継企画となる特別展「ほとけのヘアスタイル—それは単なるオシャレではない—」(2021)を開催。この展覧会では、前述の通り現役仏師による新造の仏像



京都・金戒光明寺 如来像頭部

図5 特別展「ほとけのヘアスタイル—それは単なるオシャレではない—」(2021)
チラシ・展示風景

を展示したほか、幾つか実験的な展示を試みた。ひとつは仏像の正面観をはずした展示である。展示室に入って最初に眼に入る展示ケースには、如来像頭部（金戒光明寺蔵）の左斜側面が見えるように展示。別途、パネルで紹介した螺髪制作工程と合わせてみると、頭部の局面に粒が整然と並ぶタイプの螺髪の特性を視覚的に把握することができる。また宝冠釈迦如来坐像（清浄華院蔵）は、如来ながら髻を結う珍しい像容。通常、髻は高い位置にあって見えにくく、後方の造形を眼にする機会も少ない。そこで御像の背面がみえるように展示した（この展示は賛否両論があった）。菩薩像に多くみられる髻には、実に複雑な形状も散見する。このような結い方は実際に可能なのだろうか。という疑問から、床山の経験をもつ方にご協力をいただき、近しい関係者の頭髪やカットマネキンで再現を試みた（結果は展示や図録に反映）。

「モノ」にまつわる「コト」を組み込み、観点を増やす。寺院や他館で仏像を拝す際、その観点を思い起こして頂ければ広がりをもつだろう。この展覧会と同時期、京都市内のある寺院で五劫思惟阿弥陀如来像の特別公開があった。また近隣の博物館でも特徴的な頭髪の表現をみせる仏像が展示されていた。しばしばそれらと関連づけた感想を頂戴したことは、企画者の意図に合致し、嬉しい。ただし連携していたわけではないので、内々に「勝手にコラボ」と呼んでいる。

シリーズ第三弾として、特別展「ほとけのドレスコード」（2022）を開催した。仏尊・仏像は、どのような衣を、何枚、どのように纏っているのか。この着装方法は「コト」として提示できる。さらに仏像全般に通じる敷衍性をもつ。チラシのメインビジュアルには、裸形阿弥陀如来立像（転法輪寺蔵）を掲載することにした。本像は



京都・転法輪寺 裸形阿弥陀如来立像

図6 特別展「ほとけのドレスコード」（2022）チラシ・展示品

裸形着装像と呼ばれ、裸形の尊体を造り、実際に衣を着装させてお祀りする尊像である。ただしチラシは、一見、裸形像とは判らないようにデザインした。会場で驚いてもらおう。衣に焦点をあてた展覧会の導入に、衣を着けない仏像を展示する。所蔵されている寺院では、現状、下半身に裙と呼ばれる衣を着けて安置しているが、寺院のご許可を得て、裙は外し別のケースに展示した。ともあれ裸形の尊体に衣を着装させるという様態は、どのような衣を、何枚、どのように纏っているのかという「コト」の把握のうえに成り立つ。展覧会の趣旨に相応しい。と思いながらの準備中、ちょっとした問題が発生。とある国立博物館で、裸形着装像のレプリカを用い、法衣のまとい方を実演・解説する子供向けのイベントが催されていたのである。趣旨が被ったうえにクオリティーが高い。これも「勝手にコラボ」ということにする。

衣にまつわるトピックとして衣文にも注目した。仏像には、Y字形衣文、翻波式衣文、渦文など、特定の名称で呼ばれる衣文がある。これらは果たして実際の着装のなかで生じる形象なのだろうか。ひとまず布地で再現を試みる。また前出の前田氏に衣文のモデルを制作して頂いた。検証の結果、これらの衣文には、実際の着装にイメージソースが求められる形象、彫刻技法に起因する要素、着装とは直結しないイメージソースなどが推察され、仏像に衣文を表す「コト」の背景（の一端）が垣間見えた（結果は展示や図録に反映）。特徴的な渦文を具える薬師如来立像（神光院蔵）をめぐって、展示した「コト」である。

以上のシリーズ企画とは別の担当展覧会から、展示に反映した「コト」の事例を加えておこう。特別展「チベット密教の美と祈り―北村コレクションより―」（2019）は中島小乃美氏（本学保健医療技術学部准教授／当時）をコーディネーターに迎えた展覧会である。日本仏教とは異質の思想や造形を通じ、仏教の多様性に眼を向けたこの展覧会では、導入の象徴的な展示物として、ミュージアム入口付近に立体マンダラを展示した。立体マンダラには方位が設定されている。しかし展示スペースの条件により、現実の方位に合わせて設置すると、観覧者はまず立体マンダラの背面を眼にすることになる。検討の末、儀礼で用いる状況に倣い、実際の方位に合わせる「コト」を優先して展示した。詳細は別稿「立体マンダラ小考―展示に基づく空間表現への視座―」（『佛教大学宗教文化ミュージアム研究紀要』16、2020）を参照されたい。

最後に浄土宗に眼を戻そう。浄土宗寺院では、基本的に阿弥陀如来像を御本尊として祀る。阿弥陀如来像が単独で祀られるほか、観音菩薩像と勢至菩薩像を伴う三尊構成の場合もある。さらに浄土宗特有の「コト」として、御本尊の左側（向かって右側）に善導大師像、右側（向かって左側）に法然上人像を安置する。また善導大師と法然上人の並称として両大師と呼ぶ「コト」がある（『新纂 浄土宗大辞典』「両大師」項）。当館でも時折、両大師の御像を展示する機会をもつが、その際、一具の像であれば必然的に前述の配置で展示する。しかし一具ではない場合、例えば離れた位置の別の

展示ケースに配す場合などでも、位置関係が反対にならないよう心掛ける（ただし法量や動線の関係で無理な場合もある）。例えば、速報展「浄土宗を支えた版木 其ノ壺—紙嘉・前田嘉右衛門が受け継ぐ—」（2022）では、展示室の両端に設置した展示ケース（行灯型）に、一具ではない善導大師像と法然上人像の版木をそれぞれ展示。その間の展示ケース（視き型）に阿弥陀経の版木や阿弥陀如来を表した念仏図の版木を展示した。各々独立した展示品であるが、展示空間のなかで浄土宗的な配置を構成する「コト」は、ある種の安定感をもたらし、また展示のコンテキストとは異なるコラム的な話題提供となる。あるいは両大師の配置が逆であった場合、浄土宗関係者は少しく違和感を抱いたかもしれない。

おわりに

以上、仏教文化の視点から「ミュージアムでみせる宗教文化」に寄せた報告とする。なお本稿にはフォーラム登壇時には触れられなかった事項を幾つか含めた。また原稿提出までの期間には、企画展「拝まれてきた仏像—ふたたび拝まれる日をまつ—」（2023）の準備を進めており、2023年の秋、無事に開幕を迎えた。

2024年、浄土宗は開宗850年を迎える。この慶事の裏で、解散手続きを進めている寺院がある。過疎化、少子高齢化などを背景とする、寺院の消滅。解散寺院に祀られていた仏像を展示するとともに移安先を探す。もうひとつの開宗850年。図らずもこの展覧会では、「展示するモノ」と「展示するコト」が完全に一致した。